



Title	オック語アラン方言（アラン語）の記述に関する問題 点の考察(1)
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 2009, 33, p. 5-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オック語アラン方言（アラン語）の記述に 関する問題点の考察（1）

長谷川 信 弥

0. スペイン、カタルーニャ自治州の最西北地域にあるアラン渓谷では、オック語アラン方言が話されている。この言語は、南フランスの言語であるオック語のガスコーニュ方言の下位方言であるとされてきたが、オック語のなかで唯一スペイン国内に話者のいる方言体であることから一言語名として「アラン語」と呼ばれることが多い。後述するように、2006年に改訂されたカタルーニャ自治州憲章第6条5項では、「アラン（渓谷）ではアラン語と呼ばれるオック語（La llengua occitana, denominada aranès a l'Aran）」と言及され、「オック語」として自治州全体の公用語に規定されていることから、本稿ではこれらふたつの語、つまり「オック」と「アラン」の両方を用いた「オック語アラン方言」として、何ら政治的意図なく言及する。

カタルーニャ自治州では、1979年に自治州憲章が制定されたが、ここではオック語アラン方言はアランの言葉（la parla aranesa）と言及され、教育の保障と同言語が尊重と保護の対象であることが盛り込まれている（第3条4項）ものの、具体的な言語名としては盛り込まれていなかった。その後、1983年に制定された言語正常化法では、オック語アラン方言（l'aranès）はアラン渓谷固有の言語であり、その教育や使用に対する方策などが保障されている（第28条）が、公用語であるのは同地の地名であることが明記されているのみで、言語そのものが公用語であるとは読めない。公用語として明記されるのは、1990年のアラン谷特別体制法においてである。¹⁾ さらに、1998年に言語正常化法を改正する趣旨で言語政策法が制定されたが、そこでもアラン谷特別体制法と同様にアラン渓谷での公用語である旨の記述がされていて、これらをもってオック語アラン方言のアラン渓谷における法的根拠が確立したと考えられる。そして、2006年の自治州憲章の改訂では、アラン渓谷だけでなく、カタルーニャ自治州全体の公用語として規定された。²⁾ このことの意味は大変大きく、これまではスペイン語（カスティリア語）、カタロニア語、そしてこのオック語アラン方言の3つの言語が公用語の地域はアラン渓谷だけであり、スペインで唯一の3言語公用

語地域であった範囲が自治州全体に及んだことになる。これは、たとえばバルセロナの公的機関の窓口でオック語アラン方言での対応を望む市民にはこの言語で対応しなければならないという状況が生まれることで、その体制を自治州全体で整備しておく必要が生じたことになる。これらの経緯と自治州としての政策的意図については今後の報告を待つことにするが、自治州としても州内最辺境地域の少数言語という扱いを根本的に変更する必要が出てきたわけである。

本稿は、オック語アラン方言の音声に関する記述から形態統語論的記述に至るまで、その記述の際の個別の問題点を観察し、検討することを目的とし、数回にわけて取りあげていくことにする。

1. 正書法上の問題点

オック語アラン方言では1983年に暫定版としてではあるが、公式に正書法が制定された。その後、1990年にカタロニア語学の碩学 Joan Coromines によって Coromines (1990) が刊行されたが、これは1930年に提出された博士論文が改訂されたものであり、ここで提案されている正書法が順序としては先である。また、1983年の正書法は1999年に改訂されたが、細部の変更がほとんどで、基本的には1983年版の修正にとどまっている。そのため、両年の版を合わせてひとつの正書法として言及し、これらを Normes と呼び、Coromines (1990) との間に見られる表記の違い2点について検討する。

1. 1. 不定詞語尾 -r の表記に関する問題

現代のオック語では、一般に動詞不定詞の語尾表記に関して、他のロマンス語同様、-r を表記している。しかし、この -r は無音で、さらには弱形代名詞が後置されても無音のままであることから、これを表記しない慣例がオック語アラン方言では続いてきた。それを踏まえ、Coromines (1990) でも -r を表記しない方式を取っているが、一方 Normes は -r を表記した。それらを動詞の表記例とともに表にすると以下の通りである：

表 1

	Coromines (1990)	Normes
不定詞		
第一変化	-à [parlà]	-ar [parlar]
第二変化 ³⁾	-ê, -e, -i [podé, mete, crei]	-er, -er, -ir [poder, méter, creir]
第三変化	-í [serví]	-ir [servir]

すでに述べたように、不定詞に弱形代名詞が後置される場合、ハイフンを伴うか、アポストロフによって語彙上の境界が標示されなければならない、これはカタロニア語でも同様で、スペイン語とは異なる点である。例としては、parlar に直接目的格 3 人称単数女性形 *la* を後置させると、parlar-*la* となるが、Coromines (1990) に従えば、parlà-*la* となるはずである。しかし例外的に、Normes においても、中性代名詞 3 人称 *ac* の後置形は *'c* であり、cantà *'c* となることが認められている。

このように、不定詞に関してはふたつの書記法が提案されているわけであるが、Normes のほうは古典的な、語源を意識したものであり、語尾が発音されるスペイン語のそれはもとより、弱形代名詞を伴わない場合は *-r* が発音されないカタロニア語の不定詞のそれとも歩調を合わせたものであるといえる。一方、Coromines (1990) は、実際の発音に基づいた方式であるといえ、上記のような例外を設定する必要がなく、また、命令形での弱形代名詞の書記にも共通してみられる方式、つまり語彙上の境界がハイフンで明示されるという点においても合理的であるといえよう。

ところで、Normes が制定される以前のテキストではどのように表記されることが多かったのかについても触れておきたい。12世紀から20世紀に至るまでのテキストを集め編集された Montoya (1999) においては、これに関する表記の揺れは顕著で、例えば、cercar は、この通り cercar と表記されるものもあれば、cercá やまたは cercà という表記も随所にみられ、定まっていなかったことが容易にみてとれる。このことは、不定詞の表記に限ったことではないが、特に実際の発音と書記の関係を正書法という規範で決定する際に検討を要する問題として重要視されるべきであろう。

また、現在のオック語において多くの話者とメディアが使うラングドック方言 (lengadocian) の古典書記法⁴⁾では、不定詞の語尾は *-r* を表記する立場を取っている。そのため、Normes の1999年版で、弱形代名詞が後置し、ハイフンを用いて表記する場合に無音の *-r* を復活させたことも、現在の自治州憲章においてオック語を自治州の公用語のひとつに数えるためには、都合のよい結果となったと考えられる。ここでは言語政策上の議論には立ち入らないが、このようにオック語一般の方式に同定させることが政策上の利点を伴うことも指摘できるのではないかと思われる。

1. 2. ラテン語 H- の扱いについて

表 2

	Coromines (1990)	Normes
H-	hòme	òme
F- (>f>h)	haria	haria

上表の通り、ラテン語の語頭 H- は、オック語アラン方言では無音で実現されるのが普通であるが、この表記については、Coromines (1990) は原則としてそのまま表記し、一方、Normes では語源的な表記を廃し、表記しないこととし、前項で述べた不定詞の語尾表記における語源重視とは異なる方向を示しているかのようである。また、ラテン語の語頭 F- の語については、ともに h- を表記し、結果的に両者の態度は異なる。実際には、アラン溪谷のなかでも最もフランスに近い、溪谷最北の集落である Bausen および Canejan では、この F- に由来する h-、たとえば haria の語頭音は軟口蓋摩擦音[h]と調音され、無音ではないことが知られており、Coromines (1990) でも記述されている。つまり、Coromines (1990) ではどちらも結果的に同じ表記であるが、Normes では、語源上の区別をこれらによって表そうとしているのである。

このように、Normes は語源を重視するために、語源的な表記を犠牲にし、また実用面をも重視したと考えることができよう。なお、この Bausen および Canejan の母語話者は極端に減少し、この[h]を発音する話者の数は数えるほどであることも知られている。

また、h の表記については、次の語が子音ではじまる場合の定冠詞男性単数形 eth についての議論もあり、Coromines が et と記述している一方で、このように Normes では -h を表記した eth についても、その妥当性を検討する必要がある。これについては続編で取りあげたいと思う。

2. 直説法現在 1 人称単数形活用語尾に現れる -i

オック語全般に、直説法現在 1 人称単数の活用語尾がに -i があらわれるが、オック語アラン方言においても同様に見られる。次表は、第一変化を主に紹介したもので、第二変化、第三変化においても同様に現在形では 1 人称単数形に -i が現れることがわかる。

表 3

第一変化 (-ar)		接続法現在		cf. 第二変化 (-er)		第三変化 (-ir)	
直説法現在							
-i	-am	-a	-em	-i	-em	-isqui	-im
-es	-atz	-es	-etz	-es	-etz	-isses	-itz
-e	-en	-e	-en	—	-en	-ís	-issen

[Carrera (2006): 185-212, Meyer-Lübke (1974): § 131, § 136より作成]

これについて、Fernández González (1985: 458-459) は、古プロバンス語についての諸説の紹介しているが、それを表にしたものが表 4 で、表中の a)、b)、c) について、あらためてそれらの説明を紹介し検討する。

表 4

a) 古形 第二変化、第三変化 [直説法現在]			
—	-em	cf. 第一変化動詞	— -am
-es	-etz		-as -atz
—	-en		-a -an
b) 単なる音声変化			
c) vocal “paragógica” (母音添加)			
しかし、なぜ -i か			
i) 古形にみられる			
ii) Ronjat (1937: 154) “-i n'est qu'une var. de -e en iatus (cf. § § 160 et 449) favorisée par -i dans les types à dift. <i>ai, dei, vei, -ai</i> < <i>habeo, debeo, video, -a(v)i, etc...</i> ”			
iii) 語源的に -i からの類推 cf. トルバドゥールには母音のない例が多い			
iv) doni -i < ibi cf. <i>doy, estoy, ...</i>			

Fernández González (1985: 458-459) より作成

まず a) について、古形では第二変化、第三変化動詞とも直説法現在の単数では一人称、三人称の両方で活用語尾がなく、語幹のみで表されていたため、一人称に -i を添加することによって区別される結果になったというものである。ただし、第一変化動詞では同じく一人称単数は語幹のみであったものの、三人称単数では -a で表されていたことから、-i 出現の理由にこの説明を用いる必要はない。この説明は第二、第三変化動詞のみを対象としたものであり、それを第一変化動詞にも広げるためには、類推が作用したことを持ち出す必要がある。しかし、数の上でもより多い第一変化動詞に類推が

及んだとの説明は困難なのではないかという印象を持たせる。

次に b) については、単なる音声変化の結果であるとの説明は、説明 a) に対する反論としてあげられているものと考えられるが、反論としての意義はあるであろうが、次の c) にも問題となるように、単なる音声変化で古語の語幹から -i が現れるのかに答えるものではない。

また、c) はこの母音が音声変化ではなく、母音添加によるものであると説明するものである。その際に問題となるのは、添加される音がなぜ -i なのかという点である。i) では、-i が古プロバンス語の文献に現れている例をあげ、これが広まったものであるとしているが、その過程が文献によって確認されているわけではなく、古語のひとつの現象が現代に突然現れている疑問には答えることが困難であるように思われる。これに対して、ii) の *Ronjat* の説明は、古語の母音分立 (*hiato*) である *habeo*, *debeo*, *video*, -a(v)i などの直説法現在 1 人称単数形が、それぞれ *ai*, *dei*, *vei*, -*ai* になり、ここで音韻変化によって -i が好まれて出現する傾向があったことをあげている。そこでは、例えば *habeo* の -o が -i に変化する過程は示されていないが、母音分立での -o の開きが狭まり、おそらくは -e に同化する形で -u よりも -i になる傾向が起こったことを想定していると考えられる。しかしこれらは母音添加というよりも音韻変化のひとつとして考えることもできるものの、これについては *Ronjat* で説明は与えられていない。iii) は、*FERIO* > *feri* や *AUDIO* > *auzi* など語源的に語末にあった -o の消失によって、-i となる形態が結果的にすべての動詞の直説法現在 1 人称単数形に拡大、一般化し、*vendi*, *canti* などの形態を生んだというものである。しかし、吟遊詩人 (トゥルバドール) らは、語尾に母音のない形を好んだことも知られており、すべての動詞に広汎化したことを説明するのはむずかしいのではないかとしている。iv) は、場所を示すラテン語の副詞的代名詞 *ibi* からの -i が添加されたものであるとする説明で、*Fernández González* (1985) はこれがもっとも重要な説明であるとしている。この説明では、カスティリア語の *doy*, *soy*, *estoy*, *voy* 等における副詞 *ibi* の -i と同種のものであるとしている。またそれによると、12 世紀のテキストでは -i を伴う例とそうでない例の両方がみられ、それによれば本来の副詞としての *ibi* の意味というよりも与格に相当する接辞として区別、例としては *do* および *doni* で、後者が与格 -i を伴うとしているが、これが一般化したのではないかと諸説を援用しながら述べている。しかし、-i をまったく伴うことのない動詞も数多くあり、接辞としての明確な区別を伴った使用よりも、直説法現在での 1 人称単数形のマー

カーにすぎないと思うほうが都合がよいとの説明を結論としているように思われる。この Fernández González(1985)の、ibi からの -i であるとする説明には、なぜ -e などではなく -i なのかについて、一定の合理性があると思われるものの、カスティリア語の *doy* などの例と同定することは、これらの例が全動詞に一般化したことを説明しなければならず、語源本来の -i が添加された *hay* を加えてもごく少数の動詞にしかみられない現象、それもある程度の影響は想定できるものの、決定的な強い影響は考えにくい隣接言語から起こった類推で一般化を説明することはむずかしいといわざるをえない。Fernández González(1985)も、結論的には直説法現在 1 人称単数形のマーカーにすぎない、との説明を援護しているように読めるのもそういった説明のむずかしさを感じているからかもしれない。

いずれにしても、説明のむずかしいこの現象については、決定的な結論が得られることはないと思われるが、このようにこれまでの議論を整理し、検討しておく必要性はあろうと思われる。

今回は、正書法上の問題点と動詞活用語尾に関する項目を取りあげ、問題点を整理した。正書法の制定が比較的最近ではあるものの、書記可能な話者の数が 2 千人程度と少なく、その地域も限られていることなど、周知には楽観的に望める状況があることも幸いし、アラン溪谷では積極的な広報活動、教育がおこなわれている。続編ではさらに形態統語上の諸問題を取りあげ考察していく。

(つづく)

*本研究は、平成19年度～21年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「アラン谷の言語と言語政策に関する記述的研究」課題番号19520344 による。なお本稿は、同補助金による成果である、関西スペイン語研究会第311回例会（2008年5月31日）での発表「オック語アラン方言（アラン語）の記述に関する問題点の考察」での内容に基づいたものである。

- 1) アラン溪谷の歴史的経緯等については、長谷川(2002)を参照のこと。
- 2) 2006年の自治州憲章では、スペイン語とカタロニア語が公用語であることは第6条2項でうたわれているが、そこではオック語アラン方言への言及はなく、同条5項でこれが「カタルーニャでの公用語である」ことが明記されていて、若干の差異がある。

- 3) この表は Coromines による分類であり、これと Normes や Carrera (2006) のそれは異なり、ここではこれらは第三変化に分類され、第三変化が第二変化に分類されるべきであるが、ここでは形態論上の議論には入らない。
- 4) 多田 (1988a) における「A主義者達」の「伝統的な書字法」を指す。

bibliografia

- Barès, Verònica et al. (2003) *Es vèrbs conjugadi*. Barcelona: Llibres d'Índex.
- Carrera, Aitor (2006) *Gramatica aranesa*. Lleida: Ed. Pagès.
- Conselh Generau d'Aran (1983, 1999) *Normes ortografiques der aranès*.
- Coromines, Joan (1976) *Entre dos llenguatges*. Vol.II. Barcelona: Curial Edicions Catalanes.
- Coromines, Joan (1990) *El parlar de la Vall d'Aran*. Barcelona: Curial Edicions Catalanes.
- Fernández González, José Ramón (1985) *Gramática histórica provenzal*. Oviedo: Universidad de Oviedo.
- Meyer-Lübke, Wilhelm (1974) *Grammaire des langues romanes*. 4vols. Trad. par Eugène Rabet. Genève: Slatkine Reprints.
- Montoya, Jèp de (1999) *Vademecum aranese*. Conselh Generau d'Aran
- Ronjat, Jules (1937) *Grammaire Istorique des Parlers Provençaux Modernes*, Tome III. Montpellier: Société des langues romanes.

ガルガーリョ・ヒル、エンリケ (木村琢也訳) (2005) 「アラン語——アラン谷のオクシタン語」、『スペインとポルトガルのことば』(坂東省次、浅香武和共編、大学書林)、pp.183-201所収。

工藤進 (1980) 『南仏と南仏語の話』大学書林

工藤進 (1988) 『ガスコーニュ語への旅』大学書林

佐野直子 (2007) 『オック語分類単語集』大学書林

島岡茂 (1984) 『古プロヴァンス語文法』大学書林

多田和子 (1988a) 『現代オック語文法』大学書林

多田和子 (1988b) 『オック (ラングドシヤン) 語会話練習帳』大学書林

多田和子 (1988c) 『ガスコン語会話練習帳』大学書林

長谷川信弥 (2002) 「多言語国家スペイン カタロニア自治州の場合」、『EX ORIENTE』、vol.6、pp.73-95. 大阪外国語大学言語社会学会。